

村上直先生追悼

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

82

(開始ページ / Start Page)

64

(終了ページ / End Page)

90

(発行年 / Year)

2014-09-30

村上直先生 追悼

『法政史学』八一号でもお伝えしましたが、本会顧問・法政大学名誉教授の村上直先生が、本年二月一〇日午後一二時五九分に肺炎のため永眠なさいました。享年八八歳でいらつしやいました。ご葬儀は近親者の方々のみで滞りなく執り行われましたが、先生とお別れする機会を得たいとの声は多方面から寄せられ、七月二七日に法政大学市ヶ谷キャンパスのボアソナードタワー二六階スカイホールにて、村上直先生を偲ぶ会が開催されました。当日はご子息の村上直樹氏（日本大学教授）も列席くださり、門下生をはじめ学界関係者や川崎市民ミュージアム関係者など一二〇名近い方々が参集して、会場の一角に設けられた献花台で先生にお別れのご挨拶をした後、在りし日の先生のご業績やお人柄を偲びました。この「偲ぶ会」は、本会評議員でもある本学現代福祉学部（馬場憲一教授および人間環境学部の根崎光男教授を中心に、村上先生の教え子数名が準備にあたり、ご遺族から拝借した先生宛の年賀状を手がかりに案内状を送ってくださいました。ですが、なにぶん限られた時間と人員での作業でしたので、あるいは、先生とのお別れを切望されながら、ご案内が届かなかつたという方もいらつしやるかもしれません。そのような方々には、こ

の紙上を借りまして、失礼の段を深くお詫び申し上げます。

以下に村上直先生のご略歴と主要業績、そして本学を中心に関係者の方々からお寄せいただいた惜別の辞を掲げ、本会として心からの哀悼の意を表します。（文責 本号編集担当・後藤篤子）

【村上先生ご略歴】

- 一九二五年七月二日 東京府南足立郡西新井村（東京都足立区本木町）に生まれる
- 一九四〇年四月 東京府青山師範学校第一部 入学
- 一九四五年九月 東京第一師範学校（校名変更）卒業
- 一九五一年三月 法政大学文学部（二部）地理歴史学科（歴史専攻）卒業
- 一九五八年三月 東京都立大学大学院修士課程日本史専攻修了
- 一九六五年四月 駒沢女子短期大学 専任講師↓助教授↓教授
- 一九七一年一〇月 法政大学文学部 助教授
- 一九七三年四月 同 教授

一九七四年三月 文学博士の学位を授与される（法政大学）

一九七八年四月 法政大学 文学部長・能楽研究所長・評議員（一九七九年三月）

一九八一年七月 法政大学 通信教育部長・評議員（一九八五年三月）

一九九一年六月 たましん地域文化財団 評議員

一九九二年一〇月 日本地名研究所 理事

一九九三年一月 川崎市文化賞（学術）を受賞する

一九九六年四月 法政大学名誉教授

※その他、徳川林政史研究所の所員や参与に就任し、東海大学・

山梨大学・中央大学・日本大学（大学院・國學院大學（大学院）

などの兼任講師も歴任。

二〇一四年二月一〇日 逝去（享年八八歳）

【学会活動】

一九六二年一〇月 関東近世史研究会 運営委員↓評議員↓会長↓評議員

地方史研究協議会 常任委員↓委員

一九七二年一〇月

一九七五年五月 交通史研究会 監事

一九八一年六月 日本古文書学会 理事↓常任理事

一九八二年八月 日本歴史学協会 委員

一九八三年六月 法政大学史学会 会長（一九九五年六月）

一九八七年五月 武田氏研究会 副会長

一九九五年五月 川崎郷土研究会 副会長

村上直先生 追悼

【主な編著書】

『代官 幕府を支えた人々』人物往来社、一九六三年。

『天領』人物往来社、一九六五年。

『武野燭談』（江戸史料叢書）（校注）人物往来社、一九六七年。

『江戸幕府の代官』新人物往来社、一九七〇年。

『竹垣・岸本代官民政資料』近藤出版社、一九七一年

『丕揚録・公德弁・藩秘録』（日本史料選書7）（校注）近藤出版社、

一九七一年。

『甲斐近世史の研究』上・下（共編著）雄山閣出版、一九七四年。

『江戸幕府代官史料―県令集覧―』（共編）吉川弘文館、一九七五年。

『近世神奈川の研究』（地方史研究叢書3）（編著）名著出版、

一九七五年。

『八王子千人同心史料』（編著）雄山閣出版、一九七五年。

『算法地方大成（日本史料選書12）』（校訂）近藤出版社、一九七六年。

『江戸幕府石見銀山史料』（共編著）雄山閣出版、一九七八年。

『日本史用語辞典』（共編）柏書房、一九七八年。

『日本古文書学講座』全十一巻（共編著）雄山閣出版、一九七八

～八〇年。

『わが町の歴史・八王子』（共編著）文一総合出版社、一九七九年。

『江戸幕府郡代代官史料集』（日本史料選書21）（校訂）近藤出版社、

一九八一年。

『わが町の歴史・川崎』（共編著）文一総合出版社、一九八一年。

『江戸幕府千人同心史料』（編著）文献出版、一九八二年。

『江戸幕府の代官』国書刊行会、一九八三年。

- 『古文書調査ハンドブック』（共編著）吉川弘文館、一九八三年。
- 『論集 関東近世史の研究』（編著）名著出版、一九八四年。
- 『山梨県地名大辞典』（共編著）角川書店、一九八四年。
- 『郷土神奈川の歴史』（編集）ぎょうせい、一九八五年。
- 『竹橋余筆別集』（日本史料選書25）（校訂）近藤出版社、一九八五年。
- 『鷹場史料の読み方・調べ方』（共著）雄山閣出版、一九八五年。
- 『幕藩制社会の展開と関東』（編著）吉川弘文館、一九八六年。
- 『江戸幕府勘定所史料―会計便覧―』（共編）吉川弘文館、一九八六年。
- 『近世神奈川の地域的展開』（共編）有隣堂、一九八六年。
- 『江戸幕府八王子千人同心』（編著）雄山閣出版、一九八八年。
- 『藩史大辞典』全八巻（共編著）雄山閣出版、一九八八〜九〇年。
- 『日本近世史研究事典』（共編）東京堂出版、一九八九年。
- 『文化五年仙台藩蝦夷地警固記録集成』（共編）文献出版、一九九〇年。
- 『近世社会の支配と村落』（編著）文献出版、一九九二年。
- 『近世史用語事典』（編集）新人物往来社、一九九三年。
- 『竹橋蠡簡・竹橋余筆』（校訂）文献出版、一九九五年。
- 『幕藩制社会の地域的展開』（編著）雄山閣出版、一九九六年。
- 『新訂 民間省要』（校訂）有隣堂、一九九六年。
- 『江戸幕府の代官群像』同成社、一九九七年。
- 『江戸幕府の政治と人物』同成社、一九九七年。
- 『近世高尾山史の研究』（編著）名著出版、一九九八年。
- 『江戸近郊農村と地方巧者』大河書房、二〇〇四年。
- 『高尾山薬王院文書を紐とく』（編著）ふくく出版、二〇〇五年。
- 『徳川家康事典』（共編）新人物往来社、二〇〇七年。
- 『大久保長安に迫る』（共著）揺籃社、二〇一三年。
- 『論集 代官頭大久保長安の研究』揺籃社、二〇一三年。

【惜別の辞】

村上先生の話し方

安岡 昭男

村上先生とわたしは長い期間研究室を共有していたので、思い出はつきないが、特に心に残っているのは話し方である。

会話中こちらの話を反復されるのだが、そのことはこちらの意見が尊重されたようである。

また相手の側に立った会話運びも得意な方だった。

三十数年前になるが、新築した我が家に訪ねてこられたとき「街並みがモダンでまるでアメリカの住宅地のようだ」と、お迎えに出た家内に開口一番おっしゃって、家内はすっぴん気分にはせられてしまった。

アメリカで開かれた国際会議に出席され、帰国直後のことだった。

村上先生は教育者として学生の指導に当たるとともに、近世地方研究の第一人者として多数の論文を世に送り、さらに若手の育成に力をそそいで有能な研究者を輩出している。

村上先生は「円転滑脱」なお人柄であった。

（法政大学名誉教授）

村上直先生を偲んで

伊藤 玄三

村上直先生にはじめてお会いしたのは昭和四十九年春法政大学へお世話になる事になった時であった。既に前年か東北大学を定年となられた豊田武先生が史学科に来ておられたが、まずお二人の先生に御挨拶申し上げたのである。その頃の史学科研究室は、現在ボアソナードタワーの南入口付近に位置していた第Ⅱ校舎の二階の一室で、全教員合同であった。隣室は地理学科の合同研究室であり、良く地理の先生方ともお会いする事があり、また当時地理の三井嘉都夫先生が学部長であり、学部主任として村上先生も活躍していて、特に親しい関係にあったように覚えていいる。

この史学科合同研究室が学科や法政大学史学会の日常的業務の中心であり、豊田・村上・安岡先生が主となり諸行事の計画・立案がなされており、非常勤講師の依頼などもその中から進められていた。印象的なのは、史学科草創期の岩生成一先生なども出講中であり、私としては驚異的な存在の先生方がおられたのに恐縮した次第である。史学会の講演会行事にも著名な先生方をお招きされたのは、豊田先生以下の御努力の賜物であったかと思うが、それと共に今も思い出されるのは史学会の見学会の事である。多くは豊田・村上両先生の発案であったかと思うが、鎌倉や川越方面などの史跡などをめぐる機会が得られたことは有難いことであつた。時には東横線で帰京の折に豊田・村上両先生と御一緒する機会があり、両先生のお話をうかがっていると、いろいろの発

想が飛び出してくるのに驚かされた。広く研究されていた両先生たちならではのお話であつたと考えている。

また学外では、地方史研究協議会との関連で村上先生に従って長く近世史研究者に知合を得ることが出来た。私は、何にでも興味をもつ傾向があるので、つい豊田・村上先生のおすすめのままに、会員でも無かつたという多少のためらいはあつたが、地方史研究協議会の常任委員になつた。村上先生は、間もなく委員長となつて中心的に会の運営をになわれた。しかし、私の方は同時に日本考古学協会の委員に推されて、両委員会の日時が殆ど重複する羽目になつた。その為、村上先生を補佐することができなくなつた。結局、法政大学が委員会開催に便利であるから会場借用係をしてくれといわれ、一時中断したことがあつたが、殆ど十五年余りも委員をする羽目になつた。

それと共に、地方史研究協議会を通じてその会員の多くとお知合となつた。とかく専門分野以外の人と接することが無い場合が多いのであろうが、私は村上先生を通じて広く日本史研究者達とも接することができたことは望外の幸であつた。そしてまた、その後私も二・三の自治体史編纂などに係わることになり、あの村上先生の御多忙のお姿を思い出したところであつた。

村上直先生は、御自分の研究はもとより、ゼミなどを通じて多くの近世史研究者をお育てになり、今それぞれ活躍中である。どこかで「村上軍団」という言葉を聞いたことがあつたが、まさしく法政大学の疾風の如き近世史グループの活動が観測されたことがあり、それが表現されたのであろう。先生の教育の成果はこれ

から期待できるであろう。

末尾となったが、御冥福をお祈り申し上げる次第である。

(法政大学名誉教授)

村上直先生と小笠原へ行く

段木 一行

一九八三年(平成元年)春のこと、法政大学現代福祉学部の馬場憲一教授が、東京都教育庁で文化財調査を担当しておられた時のことである。小笠原諸島の歴史を語る時に欠くことのできない重要な人物である「小花作助」のご子孫が、関係古文書を小笠原村に寄付された。小花作助は文久元年(一八六一)に幕臣として、小笠原に派遣され、現地に留まって島治に大きく貢献した。明治新政府に起用されて、内務省の小笠原出張所長になった人物である。その古文書調査を企画した馬場さんと、村上先生・安岡昭男先生・柏木一朗君と私の五人で小笠原へ渡った。私にとっては六回目の小笠原行きであった。

古文書は約二〇〇点で、あらましの解説を付し、目録を作り、全点記録撮影した。村上先生と私はその頃は東京都文化財保護審議会委員であった。村上先生は古文書の担当委員で、かつ副会長の要職にあった。小花作助関係古文書は、内容から東京都の文化財に指定すべきだと判断された。調査は真剣に行われた。幕末から明治初期にかけての古文書で、安岡先生の独壇場であった。調

査を進めて行く内に、日本の博物館史にかかわるものがあって、後日、私は「日本における博物館以前史」と表題を付けた論文を『法政大学文学部紀要』に発表した。これが日本学術会議の「記録保存論文」に指定された。

この古文書群は村上先生の熱意で、東京都有形文化財(古文書)に指定され、手厚い保護を受けている。歴史的・文化的所産の保存に向ける村上先生の確かな博識に、今更ながら心から敬意を表するところである。

私など半分遊び気分で同行したのだが、村上・安岡両先生の熱気に煽られて、ひそかに鞆の底に水着を忍ばせていたのに、とうとう小笠原の海にも入ることができず、柏木君と残念がったものであった。

村上先生が団長で「東京都歴史の道調査会」や、「武州御岳神社古文書調査会」で、宿泊調査に随行したこともあった。夜の深まる山頂の宿で、先生の含著あるお話を思い出している。

法政大学の「高尾山薬王院文書調査」や「高幡山金剛寺(高幡不動)文書調査」にも参加させていただき、親しく先生に接したことなどを、なつかしく思い起こしている。

「村上学」は机上の空論を否定し、現地でその地方の土に刻まれた歴史を追跡する「学」である。私は先生の真摯な姿勢に啓発され、実に多くのことを学んだ。それが私にとっては大きな財産になっている。

(元法政大学文学部教授)

村上 直先生

山名 弘史

村上先生は私の法政大学史学科新任時の最高齢教授でおられ、私は長きにわたってなにかにつけご指導を頂いた。先生についていつも思い出される印象はその穏やかさであった。また、難しい状況においても失わない淡々とした振舞いであった。その内心は私どものうかがい知るところでなかったとしても、会議の場などで意見の対立が解けないとき、先生の大所高所からのご意見でいつの間にか合意に至るということも度々拝見した。

先生は小まめに記録を取る方であり、また、記憶力の優れた方であった。私は史学科の歴史を語られる先生の文章の数々でその片鱗を知られることが多かった。その明晰さは最晩年に至るまで保たれた。先生の専門分野に於けるご業績について、私には語る資格が無いが、そのご研究ぶりは一見淡々としたものではなく、かつたかと勝手に推察している。日々の努力の積み重ねが、いっしか大きな成果を生み出していったのではないか。

また一方で先生の芯の強さを垣間見る機会もあった。先生がご自身の研究の歩みを語られる中で話されたことがあった。代官を研究対象に選ばれたとき、先輩の研究者からそれはやめておいた方が良くはないかと言われた。かつては時代劇などでとかく代官が悪役として描かれることが多かったせいという。でも先生は初志を曲げられなかった。法政史学会の見学会で世田谷の代官屋敷跡などを見学した際、先生の解説がごく自然のものに聞こえ、研

究対象を自家業籠中のものにするとはこのようなことかと感心したことを憶えている。

先生はご自身のものを堅持しながら、多くの異なったタイプの人々を受け入れられたように思う。先生を師と仰ぐ人が多く、また、学問上の交友範囲が広がったのもその現れであろう。先生はしばしば学生や院生を伴って文書の発掘と整理に赴かれた。文書の存在する現場で実地の経験を積ませるということを重んじられたのだと思う。ここには外見と違って先生が並々ならぬ行動力をお持ちであったことが示されている。史学科教員の旅行で葦山の反射炉を見学した際、説明の労を執って下さった現地の方とのやりとりを伺う中で、先生の研究上の人脈の広さに驚いたものである。先生のご尽力により数々の名ある先生方の講演を法政史学会の大会等でお伺いすることが出来たのも幸せであった。

今や先生のご逝去と共に一つの時代が画されたとと言えるのかも知れない。

(法政大学名誉教授)

村上直先生の思い出

澤登 寛聡

私は、昭和五十六年（一九八一）四月、法政大学大学院に入學した。その約一年前、学生時代の恩師だった北島正元先生のご紹介で、大学院の授業を聴講させていただいたのだが、先生の

ゼミナールは学問をしようという気概にあふれ、わたしもぜひ、ここで勉強したいという気持になった。

先生の授業は、主として学生の研究テーマに関する個人発表、田中丘隅の著した『民間省要』の校訂・講読、東京都教育委員会から委託を受けた吉野家文書（吉野徳太郎家・吉野禎治家）調査に関わる研究発表などであった。これらを通じて史料から史実をどのように読み取り、歴史像を組み立てるかという方法の基礎を学んだ。先生のゼミナールを通じて馬場憲一・仙石鶴義・根崎光男・相京眞澄・横浜文孝・筑紫敏夫・木龍兄己・高木正敏・根岸准子・米崎清実・中里行雄・宇佐美ミサ子・酒井耕造・植田康夫・浦男入・吉岡孝・武田庸二郎・高木知己・竹安哲男・西沢淳男・岩橋清美・水久保克英といった学友と同じ教室で勉強することができた。

また、先生は、多くの自治体史編纂に関わられていたが、私も小山市史（栃木県）の調査に連れて行っていたいたり、日光市史（栃木県）の編纂に調査員、富士吉田市史の編纂に専門委員として参加させていだいた。

先生のご自宅は東急東横線の武蔵小杉にあった。お伺いできたのは、先生のお書きになった原稿が何かを創文社かどこかの編集部に届けた時、お母様のご葬儀の時、それに先生がお亡くなりになった時の僅か三度しかなかった。ご自宅が駅から少し長く歩かねばならなかったためか、このほか何度かは武蔵小杉の駅前にあった東急系列のホテルでお会いして話をしながらコーヒーや食事をご馳走になった。

平成八年（一九九六）三月、法政大学を退職なさって名誉教授と

なられてからは一年に三、四度、電話でゆつくりとお話する機会に恵まれた。話の内容は先生や私自身の近況報告、大学院を修了した人たちの近況報告といったところであったが、これが済むと話が研究の内容におよび、一時間を越えて話すこともたびたびあった。

特に先生は、徳川家康や本多正信死後の秀忠政權、秀忠が大御所となった後の家光政權を、土井利勝を中心として話をしてくださった。先生の研究に土井利勝についての論文は見られないが、この時期における利勝の政治的役割の重要性については強く認識されておられた。先生には、戦国大名武田氏に関する研究や大久保長安についての研究がある。また、徳川家康関東入国以後の関東総奉行・代官頭の地方支配、家光政權期の関東郡代の地方支配に関する研究に顕著な業績も遺されているが、こういった視点を踏まえ、江戸幕府の初期政治史研究の空白を埋めたいとお考えになっていたのかもしれない。

先生にご指導いただいた期間は三十四年に及ぶので、やさしかった先生の思い出や御恩の全ては、ここに書き切れない。先生のご冥福を心からお祈りする次第である。合掌

（法政大学文学部教員）

村上直先生を偲んで

後藤 篤子

村上直先生のご訃報に接したのは本年二月一二日のことだっ

た。ご年齢を考えれば天寿を全うされたと考えるべきなのかもしれないが、それでもやはり「突然、なんで……」という思いと大きな喪失感を覚えずにはいられなかった。

私が村上先生と初めてお会いしたのは、一九八三年四月に兼任講師として法政大学史学科の西洋史ゼミを担当させていただいた時だった。その後も兼任講師を続けさせていただき、一九八九年四月には村上先生のご推挙のお蔭もあり、史学科の専任教員となった。以来、村上先生が定年でご退職になるまで、畏れ多いことながら史学科の「同僚」として、先生とご一緒にさせていただいた。その間、先生が私のような「若輩者」（当時。今や史学科教員歴が最長となってしまった……）に対して、いかに優しく「偉ぶらない」態度で接してくださったかについては、先生のご退職記念にあたる『法政史学』第四八号にも拙文で記させていただいた。先生がご退職になる一九九六年三月には、同年四月から私が一年間の在外研究に出る予定になっていたこともあり、史学科教員一同で修善寺に一泊旅行に行った。この時の学科旅行は、村上先生のお蔭で行く先々で厚遇を受けることができ、村上先生のご解説とあいまって、私にとっては本当に楽しい貴重な思い出となっている。

先生のご退職後も年賀状のやり取りは続いていたが、先生は必ず、なぜか諸々の校務に使われてしまうことが多い私のことを案じてくださる一文を、書き添えてくださっていた。私は二〇一二年度には、法政大学文学部九〇周年記念事業を企画・実施するワーキンググループの座長として、七月二一日にシンポジウム、一二月一日に文学部ホームカミングデーを開催したのだが、ホームカ

ミングデーには文学部を退職された先生方にもぜひお越しいただきたいと考え、村上先生にも案内状をお送りしていた。すると先生はわざわざ電話をくださり、「懐かしいし、行きたいのはやまやまのだけれど、寒い時期の夜の外出は控えるようにしているので」とお断りになりながらも、「貴女も相変わらず大変そうだね」と気遣ってくださった。今思うと、それが村上先生と交わした最後の会話になってしまった。

村上先生からは今年の年初にも、「史学科も移動があったようですね。今年も頑張ってください」としっかりと筆致で書き添えられた年賀状をいただいていた。だから、まだまだお元気でいてくださるものとはかり思っていた。冒頭に記した、ご訃報に接した時の最初の思いはそれゆえだが、本年三月二二日に山名弘史先生・長井純市先生とご一緒に先生のご自宅に弔問にうかがった折に、ご子息の直樹様から亡くなられるまでのお話を聞かせていただき、先生のご人徳に相応しい、「大往生」にも近いご最期であったと思ひ直すことができた。

最後まで多方面でご活躍が続けられ、後進の者たちにもお氣遣いくださった村上先生、本当にありがとうございました。安らかにお休みください。

（法政大学文学部教員）

追悼・村上直先生

長井 純市

一九八六年四月、私は法政大学大学院人文科学研究科日本史学専攻（旧名。現、史学専攻）修士課程に入学しました。一九九二年三月に博士課程を単位取得満期退学になるまで学籍を有し、日本近現代史を中心とする授業に出っていました。

他大学から、しかも学部卒業後五年間の高校教員生活にピリオドを打って、大学院に入学したのでした。法政大学を選んだ理由は、夜間授業開講を主とし、修士課程標準在籍年数が三年（通常は、二年）、その間日本育英会（旧名。現、独立行政法人日本学生支援機構）から奨学金が受けられるという条件に惹かれたからです。たいへん失礼なことですが、お世話になる教員スタッフについては、それらの条件の次に来るものでした。改めてその当時の先生方にお詫び申し上げます。

その代わり、今、こうして教員として学部生、大学院生に接することとなり、すでに一七年目になりますが、私のような非礼きわまりない学生（ほとんど存在しません）にも、かつて先生方から受けた学恩を思い、それに報いるような接し方をしているつもりです。

私の指導教員であった安岡昭男先生と共に、村上直先生から受けた学恩は多々ありますが、まず何より学生が抱く歴史観に対する寛容さ、包容力を挙げなければならぬでしょう。学生の立場として、啓蒙専制君主のような大学教員ならまだ少しは救いがあ

りますが、単に自尊心（時に虚栄心）が強く、わがままで開き直っていると思われる大学教員もいますから。第二に、肩に力を入れない洒脱な歴史の語り方です。地方文書を中心とする、数多くの一次史料の分析作業を地道に続けて歴史像を織り上げていく、そうした日本近世史研究の楽しさ、醍醐味が良く伝わってきました。第三に、学生、とりわけ大学院生の日常生活におけるさまざまな悩み、苦勞、問題への思いやりです。村上先生ご自身、大学教員になる過程で苦勞なざったことは、何度か直接お伺いしました。そうしたご経歴が、さりげない思いやりの背景にあったのでしょうか。入学後間もない私は、必ずしも快いとはかき言えない周囲の反応に接したことがあります。そういう時期に、村上先生には常に心温まるおことばをかけていただきました。まさに人間とはどうあるべきかを教えていただいたと、先生のご遺影を前にして改めて思いました。

村上先生の授業には、通信教育部の社会人学生やOBが何人も最前列の席を占めていることが多かったのですが、それにはそれなりの理由があるのです。先生の代官研究を中心とした日本近世史研究業績に対する評価は私の手に余るのですが、先行研究における歴史像を変える、あるいは修正、補強するという歴史研究の基本姿勢において、興味深いと感じてきたことを書き落とすわけにはいきません。

入学してしばらく経った頃、学部時代の恩師の一人である石井進先生（故人。日本中世史家）から、法政の大学院はどうですかと尋ねられたときに、そのような質問が出るはずはないのだがな

あとと思い、一瞬絶句しましたが、頭に浮かんだのは安岡、村上両先生の上記のような教育姿勢でした。ありがたいと思っっていますと答えたのに対し、石井先生は頷くだけでした。ことによると、石井先生の質問の趣旨から外れていたかも知れないのですが（なぜか、その後も同じ質問を何度か受けましたから）、落ち着いて研究をする居場所になったということはご理解いただけたと思っています。

今、私立大学およびその教職員は、グローバル化の観点から経営の改善・向上をめざして大きな変革を経験しています。その点において、故村上先生のあり方は、もっとも望ましい大学教員のあり方の一つを示していると、私は考えています。変革の基調には、できる限りすべてを数値化して知の枠で大学を評価するという考え方があるようです。しかし、それとは異なり、長く持続し、しかも年月を経ることにますます心が暖まるという情の枠における大学評価という考え方もあるのだと、先生は教えて下さいました。そうでなければ、自然に湧き上がるように先生の追悼会が促され、開かれ、多くの人々が集うはずはないからです。そうした集いのない大学や大学教員というあり方があり得るのでしょうか。

故村上直先生に心から感謝すると共に、先生のご冥福をお祈り申し上げます。

（法政大学文学部教員）

村上直先生に対する大いなる誤解

小倉 淳一

一九八五年に史学科の新入生として対面した際、村上直先生の第一印象は、今にして思えば大変失礼であるが「こわそうな先生」だった。

そのためだったのか、実は私は先生の授業を履修したことがない。近世史を学ぶためには近世文書研究会というサークルに入らなくてはならないらしく、それにも増して村上先生を頂点とする重厚な研究集団が関東各地の自治体史編纂に乗り出しているという事実は、近世史に対する敷居をさらに高めた。そして進級してみると先生のゼミは人気が高く、近世史研究への情熱にあふれた先輩達が村上先生を取り囲み、ゼミ生でもなんでもない私が、史学科のフロアで気軽に先生とお話しできるような雰囲気ではなかった（ように、学部生の私には思われた）。

そういった勝手な誤解が重なった結果、学部時代の私と先生の縁は、けつして深いものではなかったはずである。接点があるとすれば、その頃から出席していた法政大学史学会の例会・大会・見学会の場であった。発表者に対する先生のコメントを拝聴し、あるいは史跡見学で一緒にいるなどの機会が続いた。そのような中で顔だけは覚えていたのだかもしれない。しかし学部時代の私は常に、尊敬の念というよりは畏怖の気持ちをもつて遠くから先生を仰ぎ見ていたのである。

その後、私の中で村上先生に対する印象が覆ることになるのは

修士論文口頭試問の時であった。大学院棟の試問会場内には指導教授の伊藤玄三先生と、村上直先生・安岡昭男先生が並んでおられた。主査である伊藤先生からはもっと面白いものを書くように叱咤され、恐縮しきりであったが、それまで伊藤先生のお話をじつと聞いておられたかみえた村上先生がおもむろに口を開かれ、「君の論文はいいじゃないか。分量もあるし体裁もしつかりしている。図もちゃんと作ってある。」ときっぱりとおっしゃり、その場が一転して和やかになった。その時私は先生のお言葉に救われたと思ったのではあるが、同時にこれまで村上先生に対してとんでもない思い違いをしていたことに気づき、大いに反省したものである。

近世文書研究組織を編成して各地の歴史資料を精力的にまとめ続けてこられた先生が、実際には気さくなお人柄で学生の育成に定評のある方であるということとを本当の意味で知ることになるのは、横浜市の財団に就職して、先生の御指導を受けた神奈川県内の多くの研究者と出会ってからのことである（分野は異なっているが）も法政の出身で本当によかったと、心の底から思ったものである。その後史学科に着任してからも、史学会の見学会や文学部同窓会の会報記事などで村上先生には大変お世話になり、ようやくお付き合いを深めることができるようになったと感じていただけに、ご逝去の報に接して全く残念というほかない。心よりご冥福をお祈りする次第である。

（法政大学文学部教員）

村上直先生を偲ぶ

塩沢 裕仁

「塩沢、お前、甲府だったよな。お前んとこの寺、何んちゅう名だ?」「金手の尊牀寺ですが」「あそこじゃ、大久保長安の墓があるの、お前知ってるか。富田武陵の墓もあるぞ」。いつのことか記憶は定かではありませんが、何故か鮮明に村上先生とのこの会話が記憶に残っております。大久保長安のことは知っていましたが、その墓が実家の寺にあるとは驚きでしたし、村上先生が大久保長安研究の第一人者であるとはそれまで浅学故に気づきませんでした。その尊牀寺は、甲府市の城東、(旧)国道二〇号線が大きくクランクするところにあります。大久保長安の墓石は本堂向かって右手、富田武陵の墓石は左手にあります。また本堂には三つ葉葵の紋の入った幕が掛けられています。尊牀寺は武田信玄の父信虎が建立したものですので、何故か分かりませんでした。甲府徳川家との関係が村上先生からいろいろとご教授を受けたことで理解できた次第です。

また、山梨では言う事を聞かない人(特に子供に対して)のことを「お代官」といいます。小さい頃から代官は悪い人、理不尽な人と捉えていましたが、大学院の入学試験の面接など村上先生のお顔が代官に見えたときもあります。代官の研究も村上先生のご専門であり、村上先生とお話をさせていたただくなかで、石和代官、鰐沢代官などの存在を通して門外漢ながら「お代官」の意味を改めて認識するに至りました。私の場合、授業を通してという

よりも、村上先生との個人的なお話の中から学ばせていただくことの方が圧倒的に多かったといえます。この点、極めて幸いであったこと深く感謝申し上げます。

私の専攻は東洋史ですので、村上先生とお話する機会が本来それほど多くないはずですが、村上先生が山梨と関係が深かったことによって、村上先生も気楽にお声をかけてくださいました。ある時、お話していただいてお互いに驚いたのですが、村上先生がお育ちになった山梨の村が、なんと私の祖母の隣村であったのです。このこともご縁でしょうか。

これまで実家の墓参りをし大久保長安の墓石を拝するたび、村上先生にご教授を受けたことを懐古して参りましたが、これからもご恩に対し厚く御礼を申し上げたく存じます。村上先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(法政大学文学部教員)

村上直先生の法政着任と多摩の近世史研究

馬場 憲一

村上直先生との出会いは、私が大学卒業後、本格的に近世史の勉強をするため大学院に入学した一九七一年四月のことである。当時、村上先生が、「日本社会経済史」という学部授業を兼任講師として担当されるようになり、その講義を聴講させていただきたいと思い、許可を得るためにお話ししたのがその最初であった。

村上直先生 追悼

先生に名刺を渡し自己紹介し聴講のお許しをいただいたが、私の住所が先生のご研究のフィールドとなっていた東京都八王子市であることに気づかれ、旧知の地元研究者の名前を挙げられ、ご自分の研究との関わりなどを懐かしく話された。

その後、何かと親しくお声をかけていただくことになり、夏休みに入った七月上旬と八月下旬、村上先生から「八王子に行き、旧知の地元研究者に会うから同行するように」と言われ、二回にわたって一緒に過ごさせていただいた。この八王子訪問時に、先生は地元研究者にこれから法政大学が東京都の多摩地域を対象に調査研究活動を行いたいことを話され、理解と協力を得ている。

これを契機に法政大学の多摩地域を対象にした近世史研究がスタートすることになったが、同時に村上先生は十月一日付で法政大学の専任教員に就任。十月末には「八王子千人同心文書」のフィールド調査が学生三〇名余の参加を得て史学研究室主催で行われるなど、先生の着任によって史学科の近世史研究は地方文書調査を主体とする地域史研究に重きがおかれるようになっていった。

村上先生は東京第一師範学校卒業後、東京都西多摩郡五日市町（現・あきる野市）の小学校に勤務し、三十代半ばからは八王子市を訪れ代官頭大久保長安や八王子代官（関東十八代官）、八王子千人同心などをテーマに近世史研究に携わられてきたこともあり、多摩の歴史に強い関心と興味をもっており、取り組んでこられていた。そのため村上先生が指導する法政大学の近世史研究は、八王子市を手始めに秋川市、五日市町（いずれも現・あきる野市）、

青梅市、日野市など多摩地域の旧家や寺社で所蔵する古文書の調査を通して進められることになった。

そのような中で先生は一九八〇年から東京都教育委員会の依頼を受けて吉野家文書調査（青梅市）の調査団長をはじめ八王子千人同心関係資料調査団長、さらに一九八五年からは八王子市教育委員会が開始した八王子千人同心史編纂事業の編集委員会委員長なども務められ、多摩の近世史研究に精力的に取り組み、その都度、学生たちをフィールド調査に誘ってくださった。また、一九八六年からは法政大学の経済・社会両学部が多摩キャンパスへの移転を契機に、多摩図書館内に開設された地方資料室（のちに多摩地域社会研究センター）による高尾山薬王院文書（八王子市）、高幡山金剛寺文書（日野市）、武蔵御嶽神社及び御師家文書（青梅市）などの寺社調査でも調査団長として調査の指揮にあたられた。このような先生のご活躍によって、その下で調査活動に参加した学生たちは多摩の近世史研究に携わり研究者として育てられていった。

「法政大学は一九七〇年代以降の多摩地域の近世史研究を主導してきた」と地元で評されているように、地域に根差したその研究活動は多摩地域の市民に広く知られており、村上先生が多摩地域の近世史研究の深化に寄与した功績は大きく、これからも永く語り継がれていくことになると思う。

先生にお会いし師事してから四十三年。折に触れて村上先生の多摩地域での研究活動をお手伝いさせていただき、私は多くのことを学ばせていただいた。特に前述の古文書調査や編纂事業では

村上先生の下でご指導をいただいた。今日、私が多摩地域の歴史・文化に関心をもち研究を続けてこられたのは、村上先生との出会いと薫陶によるものと心より感謝している。ここに改めてご冥福をお祈りする次第である。

（法政大学現代福祉学部教員）

村上直先生との思い出

根崎 光男

村上直先生の訃報がもたらされた時には、あまりにも唐突なお話で愕然とした。亡くなられる二ヵ月程前に、仲間数人と先生を囲んで米寿のお祝いを兼ねた食事を催していたからである。その時先生は、待ち合わせのホテルに一番乗りで到着され、集合時間よりも早く着いた私たちを出迎えてくださった。会話が弾んで予定の時間を大幅に超過するほど、時間が経つのも忘れて話し込むこととなった。それほど先生のお話は尽きず、何よりお元気であった。再会を約束してお開きとなったが、その時に撮った記念写真が先生とご一緒に最後の写真となってしまった。

私が、先生に直接ご指導をいただいていたから四〇年の歳月が流れる。この間の先生との思い出は計り知れないが、今でもゼミ初日の先生との会話を忘れることはできない。学部三年進級時、江戸幕府の政治史に興味を持っていた私は、迷うことなく村上ゼミを選んだ。私の学部時代も三年になると必修のゼミを選択し受講す

ることになっていたが、三、四年生合同のゼミということ、どのような授業になるのだろうと不安とともに期待を抱きながら、初回のゼミに臨んだ。

ところが教室に入ると、ゼミ生は四年生二九名、三年生二〇名の合計四九名であり、教室は五八年館六階の八六五教室であった。とてもゼミ室と呼べるような教室ではなく、正直なところ想像していたゼミ活動ができる雰囲気でもなかった。少人数で史料講読や研究発表を通して活発な意見交換をするのだろうと想定していたのだが、大人数で議論できる状況ではなく、卒論提出を翌年度に控えて少しばかり心配になった。

ゼミが終わったあと、先生に卒論執筆に向けた研究の取り組み方について尋ねたところ、まずは古文書を覚えることと、歴史学会に顔を出すことを薦められた。すぐに友人と学内にあった自主サークル「近世文書研究会」に入り、先輩たちから古文書の手ほどきを受けることとなった。また、先生からご紹介いただいた地方史研究協議会の月例研究会が当時、私学会館（現アルカディア市ヶ谷）で開かれることが多かったので、顔を出してみることにした。どちらも、当初は力不足ゆえに付いていけなかったが、出席し続けているうちに少しずつ理解できるようになっていった。

学部時代に研究者の道を目指していたわけではなかったが、先生から実証的な研究を継続することの大切さを教えていただいたことが、自然にその道へと導いてくださったようである。また、先生が代官・幕府直轄領の研究を核に据えながら、幕政史と地域

史の両面で大きな成果を上げられていたことから、独自の研究テーマを見出し、そこから視野を広げていくことの大切さを学ばせていただいたように思う。

恩師を喪った悲しみは大きいですが、時間は確実に経過している。今はただ先生の教えを胸に刻みながら、私のできることをしっかりとやっていくことだと肝に銘じている。先生のご冥福をお祈り申し上げ、心から哀悼の意を表したい。

（法政大学人間環境学部教員）

村上先生をお偲びして

丹治 健蔵

村上先生と私との出会いは昭和三十九（一九六四）年の頃まで遡ります。当時私は法政大学文学部の研究助手を務めていました。たまたま岩生成一先生、丸山忠綱先生など史学科の先生方と史学会の打ち合わせをしていたとき、私が村上先輩に講演をお願いしてはどうかと提案しましたところ、先生方に賛成していただきましたので、早速お電話でお願いし、講演をしていただきました。

それが機縁で村上先生と親しくなり、随分長い間お世話になりました。村上先生は私より二歳年長になりますが、研究ではいつも私より先へ先へと進んでいてとても参考になりました。

ちなみに、吉川弘文館の『日本歴史』（別冊）の総目録（一、七〇〇号）の執筆者索引を見ると村上先生の寄稿数は論文、研究

余録、書評と紹介など合わせて実に三二件もありました。これは相当に多い数です。そのうち論文数は九本もありました。

それではどんな論文を書いていたのか、調べて見ると最初の論文は『日本歴史』（一六〇号、昭和三十六年十月）「幕府創業期における奉行衆―大久保石見守を中心に―」という村上先生がもつとも得意とするものでした。

つぎに、研究余録について見ると二二九号（昭和四十二年）には「川崎宿の成立と伝馬役」という慶長初年の宿駅制度成立に関する考察文が掲載されていました。

私は昭和五十年春、児玉幸多先生を中心とする交通史研究会（現交通史学会）の結成大会（駒澤大学）に参加し、以来常任委員を長く務めてきましたが、この会では村上先生が監事をお引受けになり、その後私も監事に就任しましたので、お互いに相談しながら幹事役の任務を遂行してきました。

ところで、私は昭和五十九年二月法政大学出版局から初めて『関東河川水運史の研究』を出版しましたが、そのとき村上先生からお電話を頂戴し、学位を申請するようにおすすめて頂きました。そのうえ法政大学史学会との共催で出版記念会まで開催して頂き、忘れ難い思い出となっています。

村上先生のご研究を回顧してみると『代官』（人物往来社）、『天領』（同上）、『江戸幕府の代官群像』（同成社）、『江戸近郊農村と地方巧者』（大河書房）、『近世高尾山史の研究』（名著出版）、『代官頭大久保長安の研究』（揺籃社）、それに編著や史料集など広範に及びます。そのうち特に村上先生が団長になって大学院生や卒

業生などと協力して刊行した『高尾山薬王院文書』三巻、『高幡金剛寺文書』上下二巻、それに研究報告書等は後世に残る貴重な労作と思います。

村上先生と最後にお会いしたのは三、四年前、米崎清実さんの結婚披露宴があつた品川の御殿山のホテルでした。久し振りでお会いして歓談し、帰途品川駅の改札口で左右にお別れしたのが最後となりました。

私は『法政史学』八一号を見て先生がお亡くなりになったのを知り、いささか驚きましたが、先生は満八十八歳まで生きられたので天寿を全うされたのだと内心では思っています。

終わりに先生のご冥福を心からお祈り申し上げ擲筆させて頂きます。

（一九五九年三月修士課程修了、交通史学会顧問、元法政大学兼任講師）

突然の訃報

宇佐美 ミサ子

二〇一四年、二月九日、村上直先生の訃報を知ったのは、法政大学教授馬場憲一氏からの自宅への電話でした。思わず「えっ」。私は、お返事することもできず、受話器を前に絶句。実は先生がご逝去された一週間前に、先生と電話で雑談をしました。その時の先生のお声は、いつもの張りのあるトーンではなく弱々しいものでした。「宇佐美さん、お互いに高齢なんだから、健康だけは

気を付けてよ」。これが、先生との会話の最後です。

〈最初の出会〉

私が初めて先生にご拝眉したのは、半世紀も前に遡ります。まだ、先生が駒澤大学で教鞭をとられている頃でした。

当時、先生は小田原藩の研究に手を染められ、たびたび小田原を訪問されており、私は地元であるということで、多少お手伝いをさせていただきました。この頃、私は小学校の教師をし、子どもたちに郷土の歴史を教えていましたが、教科書に登場するのは英雄ばかり。そこで私は「ご先祖さまの歴史を調べていこう」と、子どもたちと村を歩きました。

先生は、「私も手伝うよ」と、クラスの子どもたちと村内を巡回、「昔はどうだったのかな?」、子どもたちは、日没まで先生の「おはなし」に夢中でした。先生は「故木村先生（元明治大学文学部教授木村礎先生）の分野だね」と冗談を飛ばし、ご帰宅されました。私は、先生から、史料調査の意味、史料に裏付けられた人間の生活、庶民の生活を通して、真実の歴史を学ぶことの知見を得ました。

先生は、大変、個性的で、ユニークで話題が幅広く、特に、戦時中の話題になると、口角泡を飛ばすという程、若い人たちに、戦争体験を話されていました。戦争体験は、私も共通なので、女性の戦争協力、戦争責任など話題は尽きませんでした。それからまもなく私は法学部（通信教育部）に入学、先生から教養日本史のご講義を拝聴。さらに文学部史学科に編入し、再び、先生のご指導を仰ぐことになったのです。

村上直先生 追悼

〈法政大学での研究〉

本格的に学問を研究したいという願望から私は教職を退くことにしました。四〇歳、不惑の年にして、法政大学の学生です。近世史を専攻しました。先生は「よく、思いきったね。応援するから頑張りなさい」。

大学院で、私は、先生から歴史学研究の方法論をしっかりと学びました。つまり、歴史的事実を正確に捉えるための具体的な方法の一つが生なまの史料に触れ、先人の生きてきた証あかしを追体験することにあるということです。私は、地域史を専攻することで、研究の在り方、真髓に触れたような気がしました。

いみじくも、小学校で教えていた頃、子どもたちが、「先生、代官は悪代官ばかりだと思っていましたが違いますね」。これには、さすがの先生も苦笑い。勧善懲悪のテレビ時代劇に、どっぶりとかつていた子どもたちに、先生は、歴史の学び方をご教示して下さったのです。

また、先生は、『実証史学』は、決して『理論史学』と対立しているのではないのです。私は『個別』から『普遍』へと、歴史学の在り方を考えてきました。宇佐美さん、マルクスをしつかり勉強しなさい。ウェーバーもです。安良木盛昭氏や佐々木さん（佐々木潤之介「橋大学教授」も：）。

先生には、公私を問わず、大変お世話をおかけしました。衷心より深謝申し上げます。有難うございました。

いま、先生は、黄泉の世界から、ゼミの学生たちに「なにをぐ

すぐずしているの。この史料を、しっかり整理し、読みなさい」と、檄をとばしていることでしょう。

先生、ゆつくりとお休み下さい。長い年月、ご指導、ご教示を賜ったことを感謝し、追悼のことばにかえさせていただきます。

合掌

(一九八六年三月修士課程修了、元法政大学兼任講師)

村上先生を偲ぶ

安達 満

村上先生がご逝去された悲報を馬場さんが知らせてくれた。昨年七月に例年のごとく暑中見舞いとしてお届けしたトマトの着報電話をいただいたとき、「息子が、このトマト美味いなと持って行ったよ」と笑いながら話された。その後に『論集代官頭大久保長安の研究』をご恵送していただいたお礼電話の折、出版には多くの支援に与ったことを話され、最後に「安達君は今何かしてる」と問われた。いま地域の伝承が継承者を失って消えようとしているので、町の郷土研究会の仲間と記録に残す仕事を始めた。十数軒の集落に諏訪の御柱に合わせて寅歳・申歳に行う「湯立て神事」があり、その集落内の有賀姓の祝神は「オシヤムジさん」といい先祖が諏訪より持ってきたという、これらについて伝承を知る人はいない。こうしたような小さなことが各集落にあり、伝承が消えつつある状況など話した。「それは大事なことだよ、ぜひ続け

てやってください……それじゃあ」と受話器を置かれた。

先生との御縁は、不惑に近く大学院の村上ゼミに学ぶ機会を得たことにはじまる。先生は父親が山梨県垂崎市の出身で、しばしば父の実家に遊び祖父に地方文書を教わったと聞いた。先生は徳川幕府初期の民政の確立に視点を置き、特に甲州武田遺臣が登用されたことから、甲州武田氏研究の未開の分野を切り開く業績を多く残されている。山梨で農家を継ぎながら法政に通う院生事情に理解をいただき、山梨に歴史研究の後継者を育てたいという深い思いの温情に浴したことは、農業に携わりながら郷土史研究の道を歩む契機となる大きな出会いであった。

先生は研究学徒が道を上る戦略を持っておられ、課題を見つけたらいきなり大きく立派な論文に仕上げようとしない、分割して視点をあて、多くの発表機会をつくること、発表は特定機関に片寄らず広く求める、発表に継続性を持つこと、など説かれたことがある。古島敏雄先生の講座で近世治水技術の発展過程が甲府盆地の河川に刻まれているはずとの指摘を受け、村上先生にこれに取り組みたいと話した折、「安達君これはすごいチャンスだ、徹底的に古島さんに食いついて信玄堤を解明するといいいよ」と、いつもの穏やかな眼差しに強い輝きを添えて励ましてくださった。

拙著『近世甲斐の治水と開発』に先生から巻頭の辞「発刊によせて」をいただき「甲斐地域史の研究にますます活躍」と励まされたが、その期待には応えられないでいる。思うに、村上先生は人間が持つ特性である三人称の視点に広く優れた方で、周囲を温かく見守る穏やかな姿勢の原点はそこにあるのではないか。刻ま

れた感謝の気持ちは折に触れ溢れて止まないほどである。

(一九七六年三月修士課程修了)

大学生・大学院生の頃そして旅立ち

池田 昇

昭和五十六年(一九八一)三月は、法政大学大学院博士課程の最後のときであった。千葉県鴨川市で文献学習を中心にした合宿が行われた。これは村上直先生を囲んで近世史専攻の大学院生によるものであった。三月といえば暖かいはずの房総も、あのときは風が強く雨もようの寒い日であった。学生生活の最後でもあり、そのときの海の荒波を見て、世の荒波に立ち向かっていけるであろうかと思つたものである。

しかし、その後もしばらくは、栃木県小山市史編さん委員会近世部会主任である村上先生のもとで、専門委員として近世交通史の部門において日光山裏道の梅之宮宿などをテーマとしていた。したがって、まだまだ学園の庇護は続いており、まさに人生の裏街道を歩いていたといえる。世の荒波には立ち向かっていなかったのである。

思うに、法政大学文学部史学科に私が入学したのは昭和四十五年(一九七〇)四月であり、遠い過去のことといえよう。

当時は学園紛争が尾を引き、また、史学科の大黒柱であられた丸山忠綱先生が亡くなられ、授業は平常どおりに行われてはいない

村上直先生 追悼

かった。日本史概論は二年生のときに始まるが、丸山先生に代わって何人かの先生が講義をもたれた。二年生の秋(昭和四十六年)には、村上先生が教鞭をとられ、このとき初めて先生にお会いし、日本近世史を専攻するきっかけとなった。

歴史を学ぶのは授業外の場合が多く、三年生のときには東京都八王子市に多くの見学会があつて、その都度これに参加した。四年生の夏には八王子市川口町の法蓮寺で合宿が行われ、これに加わつて、八王子・多摩地域を知ろうとする意欲がまさに強くなつた。

このようなことから、村上先生の勧めもあつて、三年生を了える時点で卒業論文のテーマが決まつた。それは「近世における八王子千人同心の動向」であった。大学時代だけで歴史研究は終わりだと思つていたので、自分なりに一生懸命書きあげた。

しかしながら歴史研究を続けたく、昭和四十九年四月からは大学院の修士課程に進んだ。この課程は四年間も在籍してしまつた。

昭和五十三年四月には博士課程に進学した。前述のように編纂委員で近世部会主任の村上先生のもと、小山市史編纂をお手伝いし、近世交通史を担当していたが、五十六年三月には博士課程を修了(満期退学)した。

この大学院生の期間、村上先生からお話があつて、四十九年の秋から関東近世史研究会の委員を仰せ付かり、主に事務局の任に終始した。

しかし、関東近世史研究会との関係も、五十五年の秋からは薄れていった。これも村上先生からのお話で、先生が地方史研究協

議会の常任委員長（幹事長）の任に就かれるとのことで、事務局を仰せ付かったからである。この事務局での仕事は、五十五年の準備から始めて、第三二回大会（松山、昭和五十六年十月）と第三三回大会（甲府、昭和五十七年十月）の開催にあった。任務は約二年間であり、事もなく終了でき安堵の思いであった。

地方史研究協議会事務局の任務を了えて、約一年半後の昭和五十九年（一九八四）四月、西多摩郡日の出町教育委員会に奉職した。多大とはいえないまでも、（世の）荒波には立ち向かったが、おかげさまで、学会における事務局と市史編纂の経験を活かすことができ、平成二十三年（二〇一一）三月には日の出町教育委員会を定年退職した。今、思うに幸せであった。

村上直先生のご冥福をお祈り申しあげます。

（一九七八年三月修士課程修了）

村上先生を偲ぶ

米崎 清実

私が初めて村上先生とお会いしたのは、先生の古文書演習の授業を受講した時でした。そしてそれが、私の人生を変えたといっても過言ではありません。授業の中で、当時、先生が団長となって取り組まれていた東京都青梅市新町の吉野家文書調査にお誘いくださいました。くずし字を読むことを勉強中の学生に、実際の史料に触れる機会をご提供いただいたのです。しかし、調査への

参加は私にとって不安でした。初めての私が戦力になるわけではありません。また、私は同学年で唯一先生の演習を聴講していたため、調査先では先生以外は誰一人として知る方がいなかったからです。孤独で身の置き場に困るだろうと考えていました。ところが、うかがってみると、参加されていた多くの方から、くずし字の読み方や古文書の内容について懇切丁寧に教えていただきました。馬場憲一氏、池田昇氏、澤登寛聡氏など、今日に至るまで公私さまざまな面でお世話になっている諸先輩、同期となる武田庸二郎氏です。さらに、法政大学だけでなく、根岸茂夫氏、大石学氏、大友一雄氏など、当時にあつて新進気鋭の他大学の研究者が参加しており、右も左もわからない私に暖かい声をかけてくださいました。地元青梅の滝沢博先生からは地域のお話を聞くことができました。古文書からは江戸時代の新町村の人々の息づかいまで聞こえてきそうでした。この調査は私に古文書調査の醍醐味やおもしろさを教えてくれました。

その後も青梅市師岡町吉野家文書調査、八王子千人同心関係資料調査、日光市史編纂、富士吉田市史編纂、高尾山薬王院文書調査、現在も継続中の武蔵御嶽神社及び御師家古文書調査など、さまざまな調査を村上先生と共に歩ませていただきました。どの調査も法政大学だけでなく、他大学の若手研究者や地元の先生方との共同作業でした。調査の際、村上先生から細かな指示などがあつた記憶はありませんが、ある自治体史編纂の場では、刊行スケジュールや調査の効率を優先する行政側に対して、内容や質を重視したい私たちの意見を代弁いただきました。年齢も学歴も、もちろん

所属大学も関係無い学術研究という場で、真摯に向き合い、誰にでも平等公平に接していただいたと考えています。

先生は、代官研究の第一人者であるとともに、各地の自治体史編纂事業に携わり、実証的な研究を積み重ねることを大切にされていました。中央大学や日本大学などの講師を務めるかたわら、地方史研究協議会や関東近世史研究会、日本古文書学会、交通史研究会などの学会活動にも中心となって携わり、後進の指導育成、日本近世史研究の発展を担われました。先生のもとには多くの研究者が集い、研鑽を重ねました。法政大学では文学部長、通信教育部長などの要職を務めるとともに、高尾山薬王院文書調査や武蔵御嶽神社及び御師家古文書調査などを通じて、法政大学多摩キャンパス開校に伴う大学の地域貢献に尽力されました。

この春、突然の悲報に接しました。ご学恩にどれほど報いることができたろうか、悔やむことばかり思い浮かびますが、研究や地域貢献に対する先生のお志を受け継ぐことが教えを受けた者の務めだと思えます。心よりご冥福をお祈りいたします。

(一九八五年三月修士課程修了、法政大学兼任講師)

村上先生との思い出

西沢 淳男

村上先生との初対面は、史学科への転籍試験の面接であった。歴史オタクではあったが、英語がまったく苦手だった私は、当時

村上直先生 追悼

どの大学でも偏差値の高かった史学科には到底及ばず、二部の経済学部在籍していた。先生の書かれたものは『歴史読本』等読んでいて、それなりに専門の論述試験はできており、先生からお褒めをいただいた。その際、読んでいる本を聞かれて、事実ではあるが無意識に先生の恩師である北島正元先生の『江戸幕府の権力構造』です、と答えたところ、いたく感心され、案の定、英語は惨憺たる結果であったと思うが、転籍を許された。その年、先生は内地留学をされてゼミは持たれなかったが、夏休み中に都立大学所蔵の水野家文書を調査するので、助手をせよとのご用命で、単身手伝わせていただいた。その際、文書の撮影をしながら、『石河』これを何と読むかわかるかと質問された。当時の私が知るよしもなく、これで「いしこ」と読むのだと、初めての先生からのレクチャーであった。

その後、大学院へ進学したが、当時他大学からも「村上軍役」と称される、先生が引き受けた自治体史関係、雑誌、辞典、企画物等々さまざまな仕事の分担があった。私の場合には、学部からの進学者で、唯一先生と同テーマの研究をし、当時では珍しかったワープロを使いこなしていたために、講演会等のレジュメの作成もした。そして、先生は書かれた論文をはじめ文章は、必ず校正をしてくれと渡された。先生の書かれたものに手を入れることなど恐れ多いことであったが、自分なりに勉強をして、意見も申し上げた。これが当時軍役にプラスαであるから、大変キツかったが、先生の論文の書き方、研究方法を直接学ばせていただき、現在の自分にどれほど有益であったことか、今更ながらに思い出さ

れる。そして、今見返しても大変恥ずかしいものであるが、論文らしきもの？を書いて、先生に見ていただきたいとお渡しすると、少し手を入れて学会誌に投稿して下さった。さらに、先生はご自身の論文に直ぐ引用し、その箇所につ箋を貼り、印を付けて嬉しそうに渡して下さった。それが励みになり、次の論文執筆へとつなげることができた。

その後、単著をいくつか上梓することができたが、その評判やメディアへの書評などもみておられて、わざわざ送って下さった。写真入りで拙著が朝日新聞に取り上げられた際は、「先生が『天領』を出したときと同じだよ」と、ようやく四十五歳で大学の専任の職を得たときも、「先生も苦労して四十歳で専任になって、それから有名になったんだ」と。伊奈氏の赤山陣屋跡に居を構えたときも、先生も小杉御殿近くにご自宅があり、偶然にも共通点が多く、代官研究も継承させていただいていると思っている。全国開幕領・代官ゆかりの地を訪れると、全国を探索されていた先生のお話が必ずで、弟子であることを話すと、調査もスムーズとなり、先生の影響の大きさに敬服した。

先生の研究の原点は代官頭大久保長安である。残念ながら最後の著書となってしまった『論集 代官頭大久保長安の研究』の書評を、先生のご指名により『法政史学』に執筆することができ、また先生との最後の共同の仕事となる『徳川幕府 全代官人名辞典』は、生前には間に合わなかったが、本年十二月に東京堂より出版の予定となった。これで先生の学恩に少しでも報いられたいと思う。先生のご冥福をお祈りして、筆を置きたい。

(一九九〇年三月修士課程修了、高崎経済大学地域政策学部准教授、法政大学兼任講師)

思い起こされることも ～薬王院文書研究を通して～

外山 徹

まず、村上先生とのご縁ということで私事から始めるが、学部一年の頃から近世文書を読むサークルに属していたものの、ゼミは当時一番の関心事だった日本近代史を選び、安岡昭男先生の下にお世話になった。しかし、三年生になり文書調査に参加する機会も増えてくるとその魅力に抗し難く、四年生からは村上先生のゼミにも顔を出すようになった。大学院から先については薄ぼんやりとしていたが、大学が寄託を受けて多摩キャンパスの図書館に保管されていた高尾山薬王院文書に誰か取り組む者はいないかという話を伺い、心が動いた。安岡先生には申し訳のないことであつたが、近代史研究は将来の課題に取っおいて、当面、薬王院文書に取り組むことにご了解をいただいた。

薬王院文書は、村上先生を調査団長として一九八六年から整理・目録化が始まっていた。当時は史料集編纂の佳境にあり、その校正のお手伝いもしたが、全三巻が揃ったところで大学院のゼミの共同研究のテーマとすることになった。メンバー一通りの発表が済むと、先生から論文集にまとめてみないかとご提案があり、先輩の吉岡孝さんをまとめ役に、私もそのお手伝いすることに

なった。一九九八年に名著出版から『近世高尾山史の研究』が上梓された前年には、東京都教育委員会による高尾山の文化財総合調査が始まり、歴史（古文書）部会の責任者となられた村上先生に同道し、目録作成や報告書執筆のお手伝いをした。この調査をきっかけに、薬王院の広報紙である『高尾山報』に先生の監修で吉岡孝・岩橋清美両先輩を交えて史料の紹介記事を連載することになった。記事がたまったところで『高尾山薬王院文書を紐とく』（ふくく出版、二〇〇五）として刊行されるが、この間、先生のバイタリティによって、史料の整理と翻刻、研究、その成果の社会還元という一連のプロセスが進んだことになる。

ここで、薬王院文書研究を通して感じた村上先生のお人柄について触れてみたい。先生は大学の地域連携の仕事だからということではなく、高尾山に愛着をもっておられた。一九七八年に主だった史料を収録した小冊子を薬王院から出されておられるが、さらにその以前、戦後間もなくに私用で登山した時からだと伺った。研究者の立場としては幕政史を考えていけばよいようなものを、寺院文書になぜそうこだわられるのかと正直に思ったものだが、ご自身がこれはと興味を抱いたことについては、専門分野についての業績云々ではなく、一途に取り組まれる気質をお持ちであることに気付いた。これは、歴史を研究する者として見習わなければならない態度だと思った。また、先生の号令の下、文献目録をよく作ったものだったが、先生は何か仕事を始められるにあたって、よく「〇〇を作っておくと役に立つから」「〇〇を作ると誰々が喜ぶから」という言い方をされていた。先生の仕事ぶりには、

歴史というものに対する純粋な愛着と研究成果を皆で分かち合おうという姿勢があったのだなあ、とあらためて思い起こされるのである。

（一九九三年三月修士課程修了）

村上直先生との出会い

安田 寛子

私が村上先生と初めて一對一でお話しさせていただいたのは、卒業論文の面接指導の時でした。緊張していたこともあり、内容はほとんど覚えていません。

二度目は同じく卒業論文の面接試問の時。私の論文の表や図を見て、これは自分で作ったのかと聞かれ、そうですと答えると、先生はそういうのはとても良いと褒めて下さいました。自分の論文の表や図を自分で作るのは当たり前のことで、まさかそんなことを言われるとは思っていませんでした。驚きましたが、その時のことは今でも忘れられません。

私は結婚と同時に東京に出てきたため、こちらでは知り合いもおらず、しばらくはいろいろなお稽古事に夢中になっていました。しかし、それも次第に物足りなくなってきた時に法政大学通信教育部の存在を知り、入学しました。

当初は四年で卒業することだけが目標でしたが、卒論を書き上げる頃にはさらに勉強を続けたいと思うようになっていました。

村上先生に先のような思いがけない言葉をかけていただいたのは、そのような時でした。そこで思い切って勉強を続けたいと思っていることを先生にお話ししたところ、大学院への進学を勧められたのです。

結果、いい歳をしてまさかの受験生となったわけですが、正直なところ、語学など筆記試験がある段階で半ば諦めながらの受験でした。それでも何とか進学でき、現在まで細々とはあっても研究生活を続けてこられたのは、あの時の村上先生との出会いがあったからに他なりません。

村上先生の下での勉強は、まだ若かったこともあり家庭生活とのバランスをうまく取れず大変なこともありましたが、先生の寛大さのおかげで続けることができました。史料を使つての研究発表は慣れるまで大変でしたが、高尾山薬王院文書を使つての研究は最終的に論文にまとめることができました。また、先生の下で行った高幡不動尊金剛寺での文書整理は、本当に貴重な体験でした。

私の在学中、先生は途中で修士課程の授業からは離れられましたが、博士課程は担当していただいていたので、私は最後まで先生を指導教授と仰ぐことができました。

思い出するのは先生の笑顔ばかりです。先生を囲んで一緒に写真を撮った数々の思い出の時間、授業のあと一緒に食べに行つた学校近くのお蕎麦屋さんでの時間、いずれも貴重な時間だったと改めて感じています。

また、先生はいつもさりげなく励ましてくださいました。

今年の年賀状でも講師の仕事や論文のことで励ましの言葉を書いて下さっていて、まさかそれから間もなくお亡くなりになるとは思っていませんでした。夫も仕事を通じて関係させていただったので、夫婦ともに先生には大変お世話になりました。

最後になりましたが、先生は本当にすばらしい研究者でした。そして同時に、類い稀なる指導者でした。感謝してもしきれません。村上先生、本当にありがとうございました。

(一九九七年三月修士課程修了、法政大学兼任講師)

村上先生の思い出

福重 旨乃

私は村上先生の在職中最後の教え子にあたります。私は学部三年次と修士一年次に村上先生の指導を受けました。私の在学中は、学部では一、二年次に日本史概説で各時代の先生の講義を受け、三年に上がるとそれぞれ興味のある時代を選んでゼミに入りました。村上先生は学部生から、その温厚なお人柄を慕われて「直(ちよく)先生」「直(ちよく)ちゃん」と呼ばれていました。そのためゼミの志願者が多く、学部の村上ゼミは大所帯でした。

私がゼミに入った年の夏合宿は学部ゼミ最後の合宿だったので、村上先生が代官研究を専門にされていることから、長野県にある飯島陣屋の巡見となりました。それは真夏の暑い日だったように覚えています。巡見では飯島の陣屋や本陣、石碑等多くの

文化財を見て回りました。若い学生たちがバテ気味になっているなか、村上先生は巡見の列の先頭に立って元気に文化財を見て回られ、さすが戦前の人は体力が違うと大学院の先輩たちと驚いていました。

大学院のゼミは学部のゼミとは異なり、少人数のゼミでした。ゼミでは田中休愚の『民間省要』を講読しましたが、村上先生は全国の代官のエピソードを交えて熱心に解説をされていました。その解説の中で先生がよく「代官が時代劇の悪代官みたいなばかりだったら江戸幕府なんてすぐつぶれてしまう」と仰っていたのをおぼえています。

ある年、村上先生は蔵書を川崎市公文書館に寄贈され、私もその蔵書整理をお手伝いさせていただきました。先生は公文書館の近所にお住まいで、時々公文書館で調べ物をされていました。また、私の修論は川崎市公文書館に架蔵されている史料を用いて作成したのですが、村上先生が公文書館を訪れると閲覧室に顔を出されることがありました。その際には昼食をご一緒することがあり、その席で村上先生は、寄贈された自治体史編纂の時の話、次に行く講演会の話、代官研究の話などを楽しくそうにお話しされていました。

さらに、大学院では高尾山薬王院の史料整理をお手伝いさせていただきました。当時は高尾山の登山ブームが始まる前だったので、夏でもケールカーや薬王院の境内が閑散としており、静かな高尾山のお寺の一室で、村上先生をはじめ大学院のゼミ生とOBの方と共に何時間も史料の目録を採っていたのが思い出されます。

村上直先生 追悼

村上先生は法政大学を退官された後も名誉教授として大学院のゼミを担当されましたが、私が修士一年の時にそのゼミの担当を終えられました。その後も博士課程の方の指導があり、私と数人の有志がこの授業に聴講という形で参加させていただきました。その授業の最終回、これで本当に法政での授業が最後だという思いのせいでしょか、先生は少し涙ぐんでおられるように見えました。

村上先生が法政大学を退官された後も、川崎市の公文書館や研究会でお目にかかる機会があり、また先輩方から講演で全国を飛び回っているといったお話を伺っていました。いつまでもお元気だと思っていたので、この度の訃報に接して非常な驚きと共に、改めて温厚なお人柄や各地で精力的に代官の研究をされていたお姿を思い出すばかりです。本当にありがとうございました。

(二〇〇〇年三月修士課程修了)

村上直先生の思い出

白澤 加代子

昨年末の私共からの年賀欠礼に、思いも掛けず、とても心温まる御葉書を頂戴して、年明けに寒中お見舞いをお出しして：：年賀状ばかりになりましたが、お元気でいらっしやることとおっしゃっていただきました。そんな折の「村上直先生を偲ぶ会」のお知らせには、突然のことで、本当に驚きました。

「私たちは、村上先生が法政に着任なさって初めて卒論指導をしていたのだ」と、いつも、今でも、同期の親友と共にこのことを、訳もなく、何か誇らしく口にしております。

思い起こしますと、当時、大学は七〇年安保闘争の真つただ中で、授業が中断されたり、大学構内へも入れなかったりという状況でした。そのような中に先生は着任され、このような状態の学生の卒論指導をなさるので、きつと大変だったことと思います。史学研究室はかりでなく、時には徳川林政史研究所でも、空いたお時間にご指導いただきました。おかげさまで、無事卒論も提出できました。そして、地方史研究協議会主催の卒業論文発表会のことは、今思い出しても大変お世話になったものと有り難く、感謝の思いであります。その折に先生に筆を入れていただいた原稿は、今でも大事にしておりますが、今、改めてそれを目にしますと、先生の青インクの万年筆で、随分と多くの箇所を直していただいた跡が残っていて、懐かしくもあり、先生の熱心なご指導を思い出し、改めて感謝の思いがひとしおです。

卒業後も私的には、結婚式にも御出席いただいたり、子供の誕生に際してもお心を掛けていただいたり、先生には折々に本当に優しく接していただきました。なかなかお目にかかることも無く、失礼して過ごしておりましたが、『武州御嶽山文書』のお手伝いをさせていただいた折に、本当にお久しぶりにお会い致しました。少しも変わらず、優しくお声を掛けて下さったことを昨日のことのように思い出します。何年前でしたでしょうか、私が今住んでおります鴻巣市の、勝願寺にある伊奈氏のお墓の写真を、という

先生からのご依頼に、学生時代に戻ったような気持ちで喜んで出かけたことも思い出します。

本年七月二十七日にお久しぶりにお会いした先生は、変わらずお優しいお顔でしたが、お写真での再会となりました。本当に残念に思います。

取り留めのないものとなってしまうましたが、先生への感謝の思いとお人柄を偲びつつ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます

(一九七一年度卒業生)

村上先生のこと

大谷 麻由美

二〇一四年二月あまりにも突然、先生の訃報が入り、一瞬何が起こったのか理解できませんでした。というの私は何十年ぶりかで、三月に先生と教え子数人でお会いする約束をしていたからです。二〇一三年一二月下旬に、久しぶりに先生と電話でお話する機会を得ました。話しだすと時を越え、学生時代に戻ったかのように会話がはずみ、先生のお声は当時のままお若くて、はつらつとされていました。「少し暖かくなったら、会いましょう。良いお年を迎えてね」が最後にお聞きした言葉で、電話を切ったあとも嬉しく、春になるのが待ち遠しく思われました。

私は今、出版社で働いていますが、この世界に導いて下さったのは先生でした。子供の頃から本に関わる仕事がしたいと思っ

いたことを、何かの折に先生にお話したのかもしれませんが。歴史系の出版社をご紹介いただき、五年ほど在籍した後、編集プロダクション、現在の出版社と、ずっと好きな編集の仕事をしてこられたのも、先生のおかげだと思っています。

先生には私の人生の節目に、大変お世話になっていたことを改めて思わずにはいられません。また、少し時間をさかのぼりますが、大学四年生のちょうど卒論をまとめていた時に、事故で父を亡くしました。その時も先生は細やかな心遣いをして下さり、なんとか卒論を書き上げ、提出することができました。村上ゼミの方々の優しさも忘れられません。先生にお話したことはありませんが、先生の話し方やちょっとした表情が、亡くなった父を思い出させ、懐かしく切ない気持ちになることがありました。私の勝手な思いですが、先生は恩師であると同時に、密かな心の父でもあったように思えます。先生から受けた多くのご恩をお返しできないまま、先生は旅立たれてしまいました。どうぞ安ら村上先生、本当に本当にありがとうございます。どうぞ安らかにお眠り下さいますように。

(一九七六年度卒業生)

村上先生の思い出

池上 真由美

私は平成九（一九九七）年に法政大学通信教育部文学部史学科

村上直先生 追悼

を卒業した。先生の最晩年の教え子であり、大学を離れてからも地域で活躍される先生に身近に接するという幸運に恵まれた。

先生と初めて対面したのは、平成七年の夏で、卒業論文に関する面接指導のときであった。しかし、実はその半年前に私は村上先生の講演に足を運んでいる。当時、卒業を控えて論文のテーマを探していた私は、川崎市大山街道ふるさと館で村上先生が講演を行うことを知り、聴きに行ったのである。テーマは「矢倉沢往還」に関わるものであった。私は自分が居を置く大山街道の歴史の深さに心を打たれた。論文のテーマを「矢倉沢往還」に決めたのは、まさにこの時であった。

面接時にそのことを話すと、先生はとても喜んでくださり、地域に絞ってぜひ良い論文を書くようにと言われ、地元の郷土史家の方や、読んでおくべき基礎文献についてアドバイスをくださった。「矢倉沢往還における二子・溝口の位置と交通と商品流通を中心に」というのが論文のタイトルで、私は無事に卒業をすることができた。

卒業の最終面接を受けてまもなく先生は現役を退かれて名誉教授となられた。しばらくは大学院でも教鞭をとられていたが、その後は地元の川崎市域や多摩地域などを中心に活躍の場を広げていかれた。

私は先生と同じ川崎市内に住んでいたこともあり、先生が近郊で講義をされるときには、時間が許す限り聴講をするようになった。先生の講演はいつも満員で、ファンの方から花束を手渡されたり、講義の後も控え室には挨拶に来られる方が絶えず、その人

気ぶりにはいつも驚かされた。先生が立川や八王子エリアに講演に行かれるときはJR南武線武蔵溝ノ口駅で待ち合わせて往復の電車を一緒にすることも多々あり、行き帰りの車内では、雑談も交えて講義では語りきれなかったお話を聞かせていただくのがとても楽しく、ゼいたくなくひとときであった。

私は、フリーで雑誌の編集や執筆などの仕事をしていたが、卒論で街道をテーマにしたことがきっかけで、街道の歴史を調べようになり、知人の紹介で平成十一年に『多摩の街道』（共著）という本を出すことができた。その勢いで先生に今度は歴史の本を執筆したいと相談したところ、同成社を紹介していただいた。『江戸時代史叢書』というシリーズを出しており、村上先生もすでに二冊の本を書かれていた。シリーズの一環でというお話がすすみ、はじめは敷居が高く、とまどいもあったが、先生の励ましが支えとなり、多くの文献と格闘しながら二年半の歳月をかけて平成十四（二〇〇二）年『江戸庶民の信仰と行楽』という本を出すことができた。

出版がきっかけで、講演などの依頼もくるようになり、先生もさまざまな機会を与えてくださった。川崎市公文書館や大山街道ふるさと館などで、先生とともに講義をさせていただく機会にも恵まれた。

七年ほど前には、先生が長年委員をされていた川崎市文化財団の歴史ガイド委員に推挙していただき、現在も委員を務めさせていただいている。

最後に先生と一緒させていただいた講演は、平成二十五年五

月に中原市民館で行われた「歴史シンポジウム」であった。

現在私はカルチャーセンターなどいくつかの講座を持っているが、テーマは「街道と江戸文化」である。先生の教えを受け継ぎ、地域社会に少しでも貢献できるように、これからも研鑽と努力を積み重ねていきたいと思います。

（一九九七年度通信教育部史学科卒業生）



村上直先生遺影